『H 先生の生きざま』

『もう駄目かー？』酸素マスクを付け、ハーハーと精一杯の呼吸をしながら、薄れゆく意識の中でＨ先生は問いかけてきた。もう、まやかしの言葉や励ましなんかは必要でなかった。私は無言でうなずいた。『そうかー』と一言つぶやいた後、Ｈ先生はそっと目を閉じ、再び大きく肩で呼吸していた。そして数時間後、ご家族に見守られ、静かに息を引き取った。享年５８歳であった。

Ｈ先生は現役の大学教授であった。１９９１年９月に急性骨髄性白血病を発症し、化学療法で完全寛解（あたかも治ったような状態）に至ったものの、翌年８月に再発し、我々のいる大学病院に入院となった。教え子や同僚が多く、何かと雑音の多い前の病院を避け、あえて我々の病院を選んだのである。入院時の先生は、体格が良く、大学教授ならではの風格も持ち合わせ、とても白血病を患っているとは思えないような逞しい姿であった。

同僚が主治医となったが、病室（個室）に入ると、話術が巧みで、話題も豊富なＨ先生のペースにいつのまにか巻き込まれてしまい、いつも悠に１時間は部屋から出てこれない様子であった。ある意味、気を使いながら、先生のペースに合わせて診療にあたる同僚のことを横目で見ながら、私は「辛抱強いなあ」と正直感心することしきりであった。

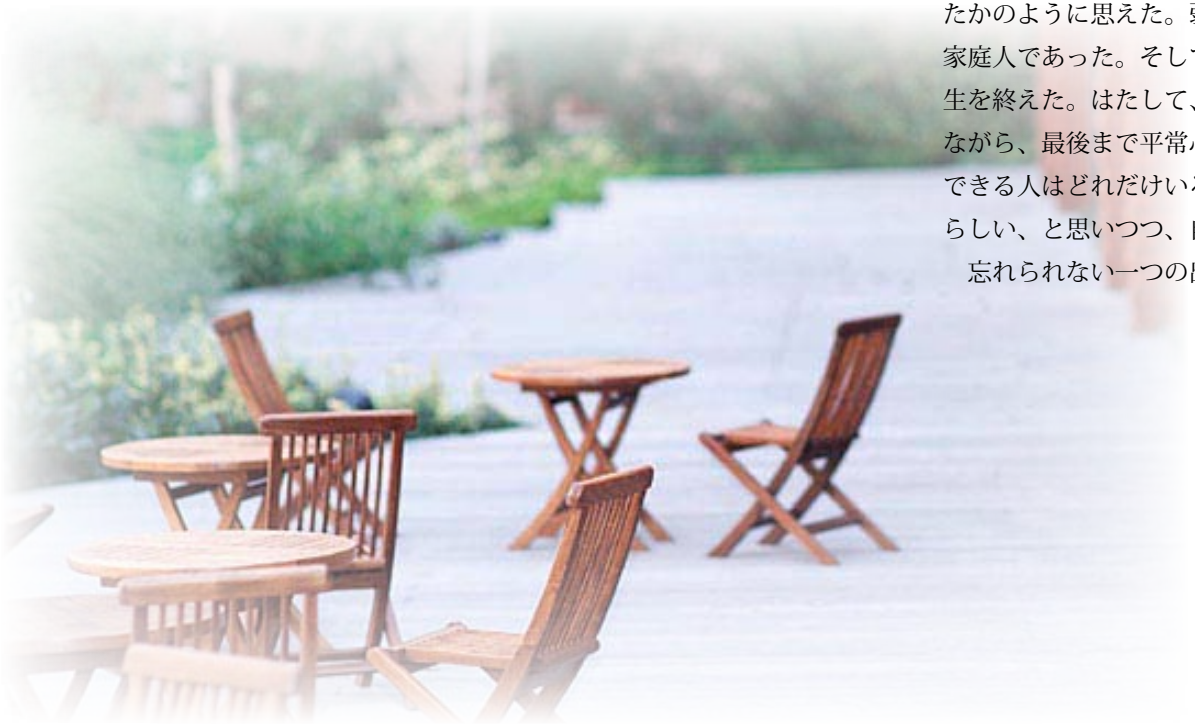
数回の化学療法を終え、再び完全寛解に入り、翌１９９３年３月に退院することとなったが、私はその直前からＨ先生と関わりをもつこととなる。先生にとっては私も教え子のようなものである。やはり私も先生のワールドに引きこまれてしまったようだった。しかし、ユーモアのセンスに富んだその喋りは、確かに人を引き付ける魅力があった。遠慮無く、何でも飾り気なく、ズバズバと話される先生に、私はとても親近感を覚えていた。

退院して２ヶ月後、白血病はまた再発してしまう。スケジュールが一杯のＨ先生は、忙しい合間をぬうように、短期間の入退院を繰り返しながら、化学療法を受けたが、既に白血病細胞の勢いを止めることはなかなか難しかった。限界が近づきつつあった。

１２月、今までもそうであったが、私は先生に包み隠さず、治療の効果は今後あまり期待できないということを率直に話し、先生の希望をお聞きした。外来の一室で、先生は表情を硬くし、いくつかの質問をした後、仕事を続けながら外来通院をして定期的な輸血と抗がん剤の内服治療を受けることを選択した。仕事を続けることはかなり厳しい状況であったが、奥さまも先生の希望に異論はなかった。通常の癌であればもはやこのような治療は全く無意味である場合も多いが、白血病に関してはしばしば輸血や少量の抗がん剤だけで、症状を落ち着かせ、短期間でも穏やかな時間を作ることができる場合

もある。そのことを踏まえた上で、H 先生も私も、治癒を目指すのではなく、QOL を高める治療を選択したのである。

予定通り、大学や講演などの仕事をこなしながら、週１回、奥さまに付き添われて、先生は外来を訪れ、ほとんど毎回のように輸血を受けた。徐々に身体的にも苦痛が増していたのであろうが、私には弱音や愚痴を一つもこぼすことがなく、いつも輸血を終えると悠然と帰っていかれた。年が明けて、１９９４年４月からはいよいよ病状は厳しさを増していた。



ある日、市民に向けての講演会が予定に入っていた。奥さまに止められながら、先生は自分で車を運転して、会場に向かい、いつものように講演を終えた。大盛況であったようである。その２日後、高熱を認め、ついに自ら希望し、入院となった。そして、８日後、冒頭のようなやり取りの後、息を引き取った。後日、奥さまが先生の車を見たところ、前方にぶつけた跡が残っていたようである。

まさに最後の力をふり絞って、最後の仕事（講演）を終えたのであろう。ぎりぎりの状態の中で最期まで H 先生は自分らしく、男らしく生を全うしたかのように思えた。弱さを周りに見せず、いつまでも威厳ある教授であり、家庭人であった。そしてご自分の病気、現実と正面から向き合いながら、人生を終えた。はたして、癌という厳しい病を持ちながら、かつ死と向き合いながら、最後まで平常心を保ち、その人らしい姿のまま、死を迎えることができる人はどれだけいることであろうか。そんな生き方ができるなんて素晴らしい、と思いつつ、自分には到底できないな、と私は感じていた。

忘れられない一つの出会いであった。

（平成 15 年 5 月 28 日　著）